

日経MJ 2016年 9月28日付

GDPの推計に議論

ある経済学者から聞いた、ノーベル経済学賞受賞者の2人の会話が面白い。「国内総生産（GDP）と国民総生産（GNP）の違いを知っているか?」「知っているはずはないだろう」というものだ。GDPといえば、経済学の入門の教科書の一番初めの方に出てくる概念だ。それをノーベル経済学賞を受賞した学者が知らないというから、面白いのだ。先端の理論経済学の研究者にとっては、GDPがどんなものであるのか詳しいことは知らなくてもよい存在なのだ。



伊藤元重の

エコノウオッチ

は、景気判断の重要な指標として使われている。年率の成長率は、政府のマクロ経済政策の目標として使われる。その数字が0・1%高いか低いかで一喜一憂する存在である。すべての統計指標に共通することだが、GDPについても実際の数値を推計するのはなかなかやっかいだ。とりわけ四半期という短い時間制約の中で数値を計算しようとすると、利用可能なデータの制約が大きい。政府が発表する四半期ごとの数値に対しては、様々な批判がなされてきた。最近では、日本銀行のエコノミストが示した結果が、政府の出した数字とあまりにも違うことで議論が起きている。GDPは、理論的には生産、分配（所得）、支出の三面から計算するこ

常に改良 向き合う姿勢を

とが可能である。どの方向から計算しても同じ結果になるはずだ。ただ、現実にはすべての数字が短期間でそろえるものではないし、収集したデータも不完全なものである。そこでどのような形でGDPの推計をするのかというところが大きな政策的課題となる。一般的に言えば、速報性、正確性、計算のための費用という中での選択ということになる。ただ、現状がベストということではない。常に見直す努力が必要である。あまりに頻繁な改正は好ましくないが、つねに改良に向き合う姿勢が必要だ。ちなみに、日本では統計整備という地味な作業にお金をかけなさすぎるという批判がある。政策判断における統計の重要性がますます高まる中でこれは重大な問題だ。

ところで、冒頭に触れたGDPとGNPの違いは何だろうか。簡単にいえば、GDPは日本国内で生みだされた付加価値の総和、GNPは日本の居住者が生んだ付加価値の総和である。その違いは国境を越えた配当や利子などの所得となる。GNPはGDPに海外からの所得の流入と海外への所得の流出の差を加えたものとなる。海外に膨大な資産を持つ日本では、GNPがGDPよりも大きくなっている。ちなみに、最近ではGNIという概念が目されている。これは日本の国内で生み出された付加価値ではなく日本の国民が消費や投資に使える付加価値の総和のことだ。GNPにさらに日本の交易条件の変化が付加されたものだ。輸入品が安くなったたり輸出品が高くなったたりすればそれで国内の消費や投資に可能な額が増えるからだ。（学習院大学国際社会科学部教授）